

東京都豊島区 30代 男性 大学職員



乳幼児に必要なもの

ミルクを作るのに必要なお湯、そしてベッド

最初は老若男女分け隔てなく、同じ教室に誘導していたのですが、なかには赤ちゃんや小さなお子さんを抱えたお母さんの姿も見かけました。そこで、乳幼児と母親のために、別の教室を開放することにしたのです。母子合わせて40～50人ほどの人たちを、5部屋に分けて休んでもらうことにしました。

大人用に水と食料は配付していたのですが、乳幼児に必要なものは予測していなかったものもありました。まずはお湯。ミルクを作るために必要でした。また、図書館にあった簡易用のベッドを教室に持参しましたが、高さがあって乳幼児は転落する危険性があるとのことから、体育で使用するマットを改めて運び入れることにしました。これでやっとお子さんを寝付かせることができるだろうと、お母さん達も少し安心した様子でした。

この日はかなり寒かったのですが、小中学校とは違い、大学には毛布の準備はあまりありません。今回は暖房をつけて対応しましたが、もし、電気が通っていなかったら、果たして受け入れることが可能だったかと、考えてしまいます。



横浜市 30代 男性 会社員



冷静でいられたのは、不安を煽らぬラジオのおかげ

あお

東日本大震災が発生した時、私は横浜にある会社にいました。会社は9階建てのビルの9階。棚の上の段ボールや書類などが落ちてきました。

そして役に立ったのが、ラジオ。普段からラジオをかけながら仕事をしているのですが、ボリュームを大きくして、被害の状況、電車の運行状況などを確認しながら仕事を続けました。もしもテレビの映像を、それも津波の映像を見ていたら、平常心でいられたか…自信がありません。そういう意味でも「ラジオで良かった」と思いました。

自宅は会社から歩いて20分、自転車で10分位という距離。夜10時過ぎ、いつも通り、自転車で帰りました。大きな国道を歩いている人が凄く多かったこと、そして私の横をローラーブレードの人が通り過ぎて行ったのが印象的でした。

私の仕事は広告代理店なので、大地震が起こって以来、「イベント中、もしも大地震が起こったら?」「大地震でイベントが中止になった時は?」などのマニュアルを必ず作るようになりました。



小林市 30代 男性 自動車販売業



灰で新車が台無しに

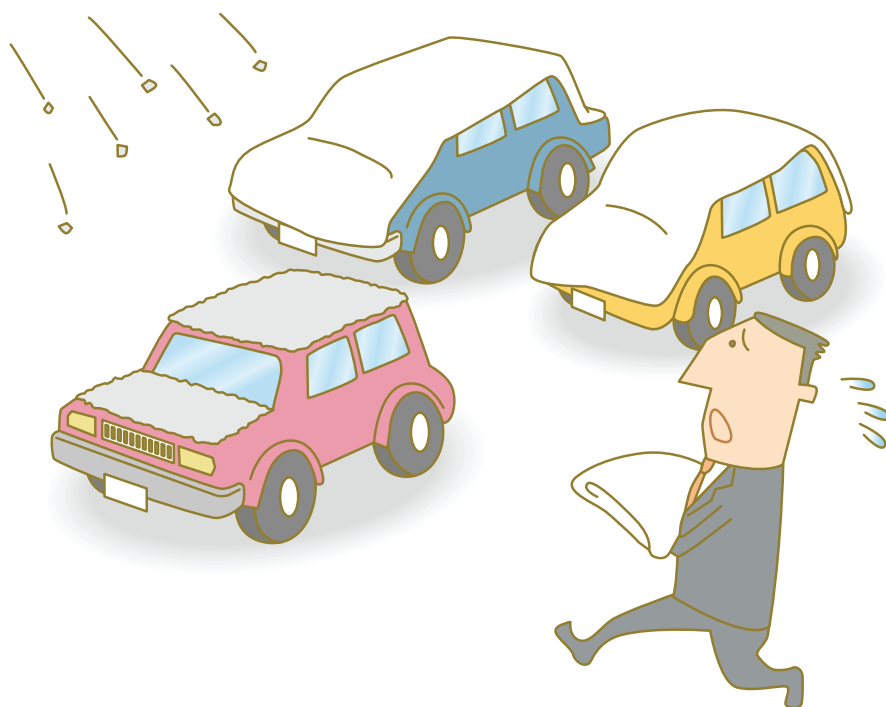
毛布をかけて被害を防ぐ

噴火の翌日、店に行くと展示してある車に大量の灰が積もっていました。灰は付いただけで車に傷を付けてしまうので、新車や新古車は売り物にならなくなり会社は大損害を受けてしまいました。

もちろん、お客様からお預かりしている車にも灰は積もりました。お客様にお詫びの電話を入れると、「天災ですから仕方ない」とおっしゃってくださる方もいましたが、屋根のある所に保管しておいて欲しかったとおっしゃるお客様もいて申し訳ない思いでいっぱいになりました。

それからは会社で大量の毛布を購入し、帰宅する前に全ての車に毛布をかける作業をはじめました。そのおかげで灰による被害を防ぐことができました。

私自身も、噴火の後は車を車庫に入れるようになりました。



人に頼る避難より自主避難を！

徳島市 50代 男性 消防団員

災害対応にあたっていると、避難する側の人の心構えが大事ななと思います。「犬を飼っているので、犬を連れていってもいいか」とか、「寝る布団はあるのか」、「食うものはあるか」とか、いろんなことを言う人もいました。

市営住宅の人たちを避難させに行ったときには、消防団が車で送り迎えしてくれるというような考えでいるから、なかなか自分から動かないんですよ。みんな乗用車を持っているんだから、各戸で誘い合って乗っていったらいいのに、悲しいかな、それができない。何度も車で往復しなければならず、時間もかかって大変でした。

それ以降、台風時などの出水については早目の避難ということで、住民の皆さん方には、早い形で自主的に避難をくださいというようなマニュアルづくりをしています。

これからは住民の皆さんが自主的に動く自主防災会のようなシステムをこしらえておく必要があると思いますね。



危機一髪、家を出た後に土砂くずれ

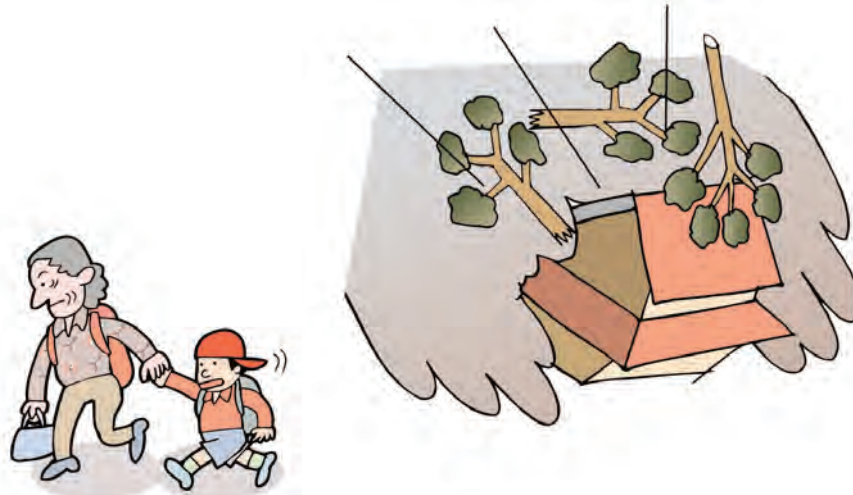
宮津市 30代 女性

その当時、上の子が幼稚園で、下の子が保育所に通っていました。私は工作中だし、家族みんなが川を挟んでばらばらのところにいたわけです。

上の子は幼稚園が終わって実家のほうに預かってもらっていましたが、実家に迎えに行こうにも川を渡らなければならないのです。

で、実家のほうに、「雨がすごいし、川の水があふれてきているみたいだから、私の家のほうに行っといて」とお願いしたんです。それから保育所のほうは主人に引き取りを頼みました。

結局、母が家を出た何分後かに土砂崩れがあって、家は全壊しました。実家は一番山側にあって、その年は結構雨が多く、何回か近くのがけが崩れていたもので、何となく「怖いな」と思っていました。早く移動してもらって、ほんとに良かったなと思っています。



風水害

一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

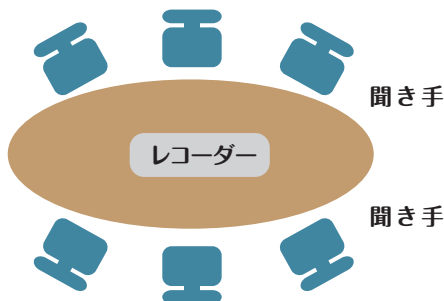
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行

内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>